

第三者意見

CSR報告書を作成し、これを公表する意義としては、企業が推進してきた具体的なCSR活動をステークホルダーに知ってもらうこととともに、将来に向けてのCSR経営を社会に対してコミットすることにあります。予見することが困難で、かつ激変する事業環境のなかで、企業がその社会的責任を誠実に果たしていく決意を公にすることは勇気のいる行為だと思われま。す。「企業の法的責任」の先に「企業の社会的責任」があるといわれていますが、法的責任すら十分に果たせず、不祥事を起こしている大企業が後を絶たない状況が続いています。そうした中で、久光製薬の「CSR報告書2012」は、これまで必ずしも明確でなかった同社のCSRに対する考え方と重点課題を整理し、そのための具体的な取り組み姿勢を記述しています。これは、これまでの久光製薬の地道なCSR活動の成果であり、また、ステークホルダーとの間に信頼関係を構築する上で、大きな効果を生むものといえま。す。まず、こうした久光製薬の勇気ある行動に敬意を表したいと思います。

CSR活動の考え方では、久光製薬本体だけでなく海外の関連会社を含めたグローバルなCSR活動が重視され、またダイアログなどを通じてステークホルダーの声を取り入れようとする姿勢が明言されています。さらに、報告書では、「グローバルなCSR推進」、「環境負荷低減」、「公平で透明性のある取引」、「多様性を重視した職場環境の向上」及び「ステークホルダーとのコミュニケーション」が5つの取り組み重点課題として取り上げられています。すべての取り組みが一挙に成果を生み出すことは難しいと考えられます。各年度の目標を設定し、着実な歩みを続けてほしいと思います。今後のCSR報告書のなかで、これらの課題への取り組み状況についての具体的な報告がなされることによ

う。どのような成果が報告されるのか、大いに期待しています。

次に、今年度の報告書の特色として、「コーポレートガバナンス」、「お客様とのかかわり」、「従業員とのかかわり」、「社会とのかかわり」及び「環境とのかかわり」の5つのカテゴリーに対してそれぞれ特集記事が取り上げられています。この特集は、とかく平板な説明になりがちな5つのカテゴリーへの導入としてアイスブレイキング的な役割を果たしており、効果的であります。特に4名の従業員の方々による対談記事である「従業員ダイアログ」では、久光製薬の従業員の方々によるCSR活動の重要性や問題点の認識レベルの的確さが示されています。これは、これまで従業員の皆さんが「CSR報告書を読む会」を開催するなど、CSRに対する意識を深める活動を継続してきたことの成果だと思われま。す。

昨年3月11日の「東日本大震災」は、多大な被害をもたらすとともに、企業行動やそこで働く従業員一人ひとりの行動にも大きな変化を与えたと考えられます。リスクマネジメントの重要性を再認識するとともに、企業と従業員の一体感や企業グループとしての結束が強化されたはずで。す。また、企業のCSR活動にも変化が見られます。多くの企業が株主などと協力して被災地支援に向けた取り組みを推進していることがその例といえま。す。「天災は忘れた頃にやってくる」と言われています。「東日本大震災」での教訓を風化させることのないよう、留意していかなくてはなりません。「CSR報告書2012」においても「事業継続計画(BCP)の整備」、「緊急連絡システム」、「防災訓練の実施」などの記述を通じて、久光製薬としてのリスクマネジメント体制が整備されていることがわかります。また、特集として、海外子会社ノーベンにおけるCSRへの取り組みが紹介されています。今後は、企業グループとして共通

の理念のもとに、CSR活動が展開されていくことが求められることによ。う。さらに、重点課題の一つである「ステークホルダーとのコミュニケーション」で述べられているダイアログを具体的にどのように進め、また各ステークホルダーの声をどのようにCSR活動に取り入れていくかが問われることになりま。す。

5年目となる久光製薬「CSR報告書2012」は、これまでの報告より一層親しみの感じられる、また内容の濃いものになっています。中富社長の「ごあいさつ」に述べられているように、「CSRを企業活動の重要な柱」とし、「グローバル社会にとって価値ある企業をめざす」ために、最大の努力を惜しまないことが大切でありま

す。久光製薬が、CSR活動を深化させ、事業の進展を実現させていくことを期待しています。



中部大学経営情報学部教授
牧野 英克

第三者意見をいただいて



常務取締役執行役員
CSR担当
杉山 耕介

中部大学経営情報学部の牧野英克教授には、2008年のCSR報告書発行以来、当社のCSRの流れを俯瞰していただき貴重なご助言をいただきました。改めて御礼申し上げます。

2012年はCSR活動の考え方と重点的に取り組むべき課題を、CSR報告書の中に明記しました。牧野教授のご指摘のとおり、「すべての取り組みが一挙に成果を生み出すことは難しい」かもしれませんが、地道に活動を進め成果を出したいと考えています。

また、海外で事業展開しているグループ各社を含め、久光グループ企業全体でCSRに取り組まねばならないと考えています。事業を行っている地域や社会で、その文化や風土に配慮しながら誠意を持って社会貢献に取り組んでまいります。

当社に何ができるのかを把握し、独善的な社会貢献にならないように、当社の“あるべき姿”を探求してまいります。

2011年は東日本大震災により、これまでの価値観が見直される年となりました。当社は、「激変する事業環境のなかでも社会的責任を誠実に果たしていける」ように、事業を継続するための体制の整備をはじめとし、より一層の努力をはらってまいります。皆さまのご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。